

## 【 研究 主 題 】

### 課題を解決するために必要な資質・能力を育成する授業に関する研究 －主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して－

現在の児童生徒が成人して活躍する頃の社会は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく変化し、児童生徒が就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになると指摘されている。そのような社会において直面する課題は、複雑であったり未知のものであったりし、答えが多様で正答の定まらないものであることが多いと言われている。

このような社会の変化を踏まえて行われた文部科学大臣から中央教育審議会（以下「中教審」という。）への諮問においても、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究していくことができる児童生徒を育成するための学習指導の在り方についての検討が求められている（資料1-1）。

そこで、本研究では、課題を解決するために必要な資質・能力とはどのようなものを明確にした上で、そのような資質・能力を育成するために、授業において解決に取り組ませるべき課題はどうあるべきか、児童生徒が主体的・協

働的に学ぶためにはどのような工夫が効果的かについて、学習活動や評価の在り方から明らかにしようと、平成27年度から2年間にわたって取り組んできた。

中教審による「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下「答申」という。）では、育成を目指す資質・能力として、学校教育法に規定された、いわゆる「学力の三要素」を踏まえた「資質・能力の三つの柱」が示された。併せて、このような資質・能力を育成するために「主体的・対話的で深い学び」（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善が示された（資料1-2）。

本研究は、このような教育の動向と方向性を同じくするものであり、未来の創り手となる児童生徒に日々の授業を通して課題を解決するために必要な資質・能力を育成することを目指したものである。各学校における授業改善の一助となれば幸いである。

#### 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問） 平成26年11月20日

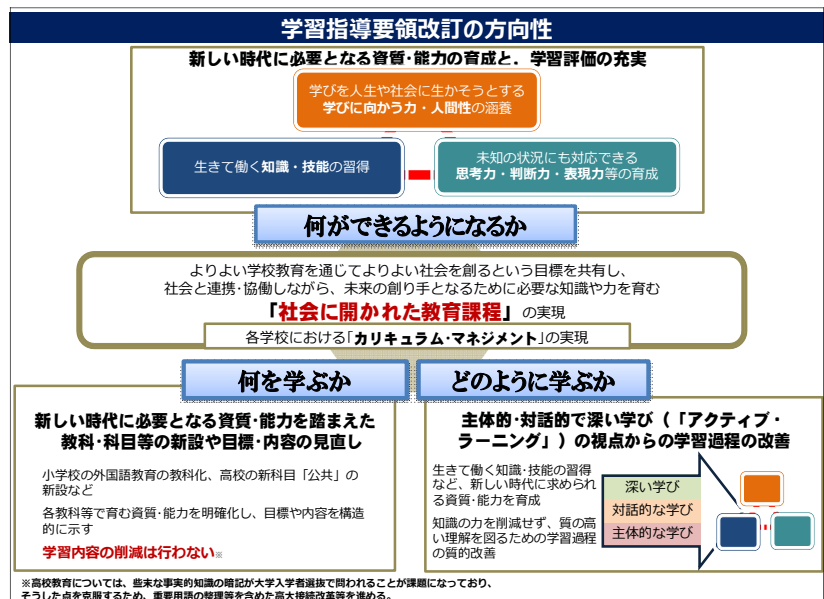
（前略）

これらの取組に共通しているのは、ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていきけるようにすることが重要であるという視点です。

そのために必要な力を子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。

（下線は筆者による）

#### 資料1-2 学習指導要領改訂の方向性



※ 高校教育については、些末な事実的知識の暗記が大学入学選抜で問われることが課題になっており、そつした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革を進める。

※ 中央教育審議会答申（平成28年12月21日）補足資料から転載

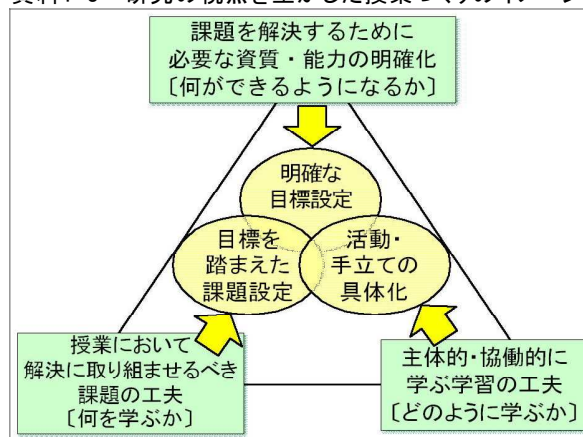
1 研究の目的

本研究の目的は、時代背景や教育の動向を踏まえ、課題を解決するために必要な資質・能力を授業を通して育成するために、児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して、授業改善に資することにある。そこで、まずは、児童生徒に育成したい課題を解決するために必要な資質・能力とはどのようなものかを整理し、明確にする。次に、そのような資質・能力を育成するためには、授業においてどのような課題に取り組ませるべきか、課題設定の考え方や工夫の視点について明らかにする。そして、児童生徒が課題解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習の在り方について、考え方や工夫の視点を明らかにする。

このような視点から研究を進めることは、授業づくりの過程において、育成したい資質・能力を踏まえた明確な目標設定や、目標を踏まえた課題設定、学習活動や教師の手立ての具体化につながる事が期待できると考える(資料1-3)。

なお、本研究は、小・中・高等学校の国語科、社会・地理歴史・公民科、算数・数学科、理科、外国語活動・外国語科を対象としたものである。また、検証授業の実施に当たっては、現行学習指導要領に基づいて評価の観点を設定した。

資料1-3 研究の視点を生かした授業づくりのイメージ



2 本県の教員の意識や取組に関する実態

(1) 調査の目的

本県の教員は、児童生徒の資質・能力の育成にどのような課題を感じているか、また、授業で取り組ませる学習課題や学習活動に対してどのような意識をもって取り組んでいるかについて、実態を明らかにする。

(2) 調査の概要

ア 調査内容

- (ア) 児童生徒に身に付けさせたい力について
- (イ) 授業で取り組ませる学習課題について
- (ウ) 授業で取り組ませる学習活動について

イ 調査対象

研究協力員、短期研修受講者、研究提携校教員(小学校271人、中学校158人、高等学校65人)

ウ 調査期間及び調査方法

平成27年7月から12月において、質問紙調査法(選択式、一部記述)にて実施

(3) 調査の結果と考察

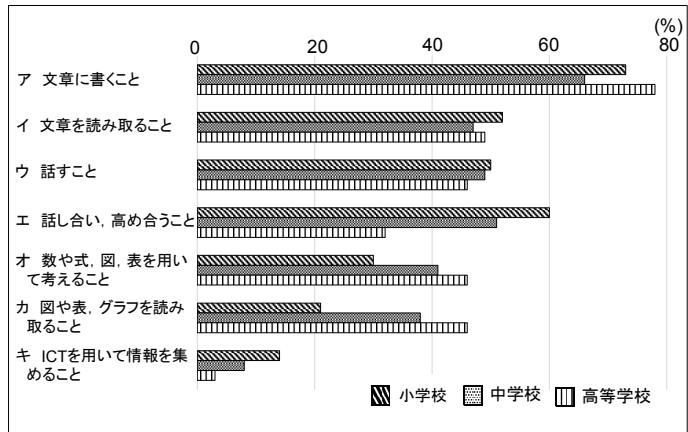
ア 児童生徒に身に付けさせたい力について

- (ア) 課題解決に必要な基礎的な力について

次の各項目は、児童生徒に身に付けさせたいと考えられる基礎的な力の主なものです。これらのうち、あなたが現在授業を担当している児童生徒について、不十分だと感じているものを三つ選んでください。

どの校種においても調べたことや考えたことを文章に書いたり話したりすることや文章を読み取ることが不十分であり、特に、小、中学校では、話し合いを通して考えを高め合うことが不十分だと感じている教員が多いことが分かった（資料1-4）。このような傾向は、平成27年度全国学力・学習状況調査の分析でも指摘されており、児童生徒の思考・判断・表現を促す学習活動の工夫・改善が必要である。

資料1-4 不十分だと感じる基礎的な力

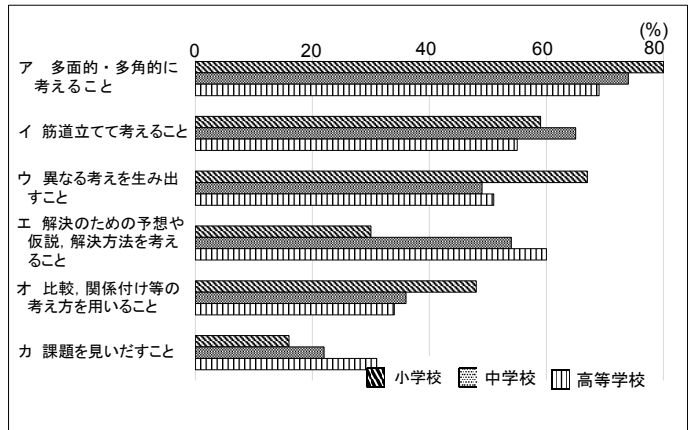


(イ) 課題解決において発揮される思考力について

次の各項目は、児童生徒に身に付けさせたいと考えられる思考力の主なものです。これらのうち、あなたが現在授業を担当している児童生徒について、不十分だと感じているものを三つ選んでください。

どの校種においても、多面的・多角的に考えることや筋道立てて考えることが不十分であり、特に、小学校では異なる考えを生み出すことが、中、高等学校では解決のための予想や仮説、解決方法を考えることが不十分だと感じている教員が多いことが分かった（資料1-5）。このような力は課題解決的な学習を通して高まると考えられるものであり、一層の充実を図る必要がある。

資料1-5 不十分だと感じる思考力

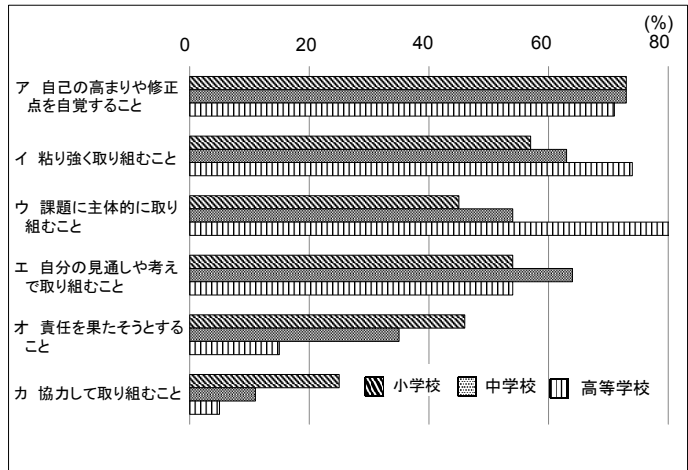


(ウ) 課題解決における学習態度について

次の各項目は、児童生徒に身に付けさせたいと考えられる学習態度の主なものです。これらのうち、あなたが現在授業を担当している児童生徒について不十分だと感じているものを三つ選んでください。

どの校種においても、自己の高まりや修正点を自覚することや粘り強く取り組むこと、自分の見通しや考えで取り組むことが不十分であり、特に、高等学校では課題に主体的に取り組むことが不十分だと感じている教員が多いことが分かった（資料1-6）。このことから、児童生徒が課題を自分に関係があることと受け止め、粘り強く主体的に取り組めるように工夫するとともに、見通しや振り返りを促す活動の充実を図る必要がある。

資料1-6 不十分だと感じる学習態度

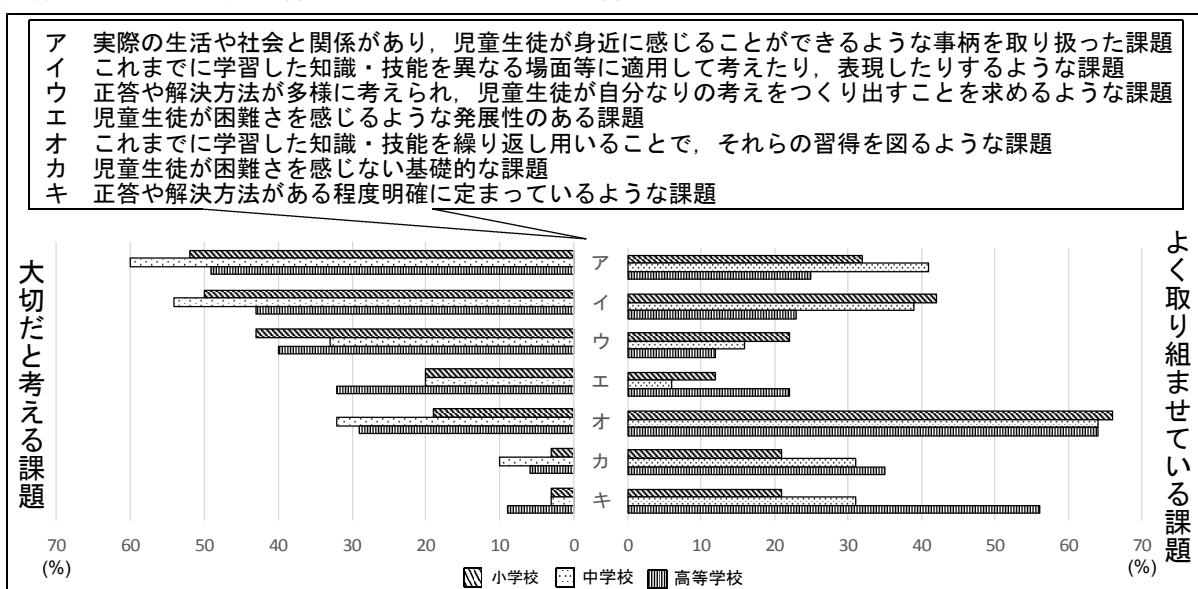


イ 授業で取り組ませる学習課題について

児童生徒の学習意欲を高め、主体的な思考や表現を促すためには、どのような課題に取り組ませることが大切だと考えますか。また、あなたがかねての授業においてよく取り組ませている課題は、どのようなものが多いですか。それぞれ三つ選んでください。

どの校種においても、ア実生活や実社会との関連を意識させる課題や、イ習得した知識・技能の活用を促す課題等が大切だと考えているが、かねての授業ではそのような課題にはあまり取り組ませておらず、オ知識・技能を反復することによって習得させる課題やキ正答や解法がある程度定まっている課題等に取り組ませている教員が多いことが分かった（資料1-7）。このことから、次世代を担う児童生徒に求められる課題解決に必要な資質・能力とはどのようなものか、また、それらを育成するためにはどのような課題に取り組ませるべきか見つめ直すとともに、単元の指導計画への適切な位置付けや効果について検討する必要がある。

資料1-7 大切だと考える課題とよく取り組ませている課題

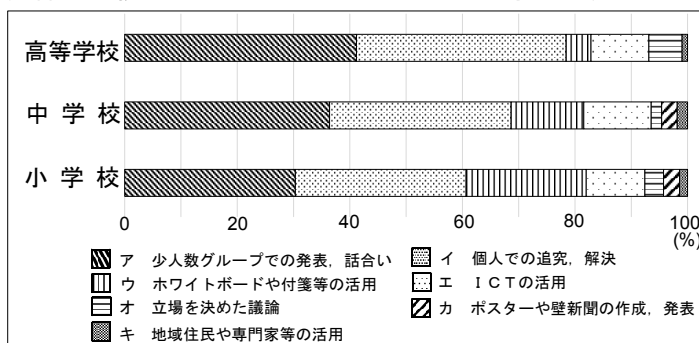


ウ 授業で取り組ませる学習活動について

あなたが、かねての授業において児童生徒によく取り組ませている学習活動は、どのようなものが多いですか。三つ選んでください。

どの校種においても、ア少人数グループで発表し合ったり、話し合ったりする学習活動やイ個人で追究し、解決を図る学習活動に取り組ませている教員が多いが、ウホワイトボードや付箋等の活用及び、エICTの活用、オ立場を決めて議論する活動の取組は少ないことが分かった（資料1-8）。このことから、

資料1-8 授業においてよく取り組ませている学習活動



児童生徒がグループや個人で思考・判断・表現する学習活動を設定してはいるものの、どのようにして思考させたり表現させたりするのか、教師の手立てが具体化されていない場合があることがうかがえる。そこで、児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的であるか明らかにする必要がある。

### 3 課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

#### (1) 学校教育法に基づく育成したい資質・能力

学校教育法第30条第2項が定める学校教育において重視すべき学力の三要素は「基礎的・基本的な知識・技能」, 「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力（以下, 「思考力・判断力・表現力等」）」, 「主体的に学習に取り組む態度」である（資料1-9）。これを踏まえ, 中教審答申においては, 育成を目指す資質・能力の三つの柱が資料1-10のように示されている。当センターでは, この三つの柱を課題を解決するために必要な資質・能力と捉えている。

この三つの柱を児童生徒が授業を通して身に付けていくイメージを自動車为例に模式図で示すと, 資料1-11のように捉えることができる。 「基礎的・基本的な知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」は, 車の両輪として捉え, バランスよく育成すべきである。「主体的に学習に取り組む態度」は, 課題解決の原動力となるエンジンとして捉え, 情意面の育成も重視すべきである。その際, 児童生徒が生きていくこれからの社会の様相を考慮すると, 課題解決に対して主体的に粘り強く, 責任をもって取り組む態度や, 考えの多様性を尊重しながら互いのよさを生かして協働する力やコミュニケーションを行う力, 社会に参画したり環境へ配慮したりする姿勢がますます重要である。また, このような態度等の育成に当たっては, 児童生徒自らが課題解決への見通しをもったり, 解決の過程や結果を振り返ったりすることを通して, 自己の高まりや修正点を自覚することが重要である。このような自覚は, 課題解決への方向付けを図ることにつながることから, ハンドルの役割を果たすものと言える。主体的に学習に取り組む態度を養うためには, 児童生徒自身が自らの考えの変容やそれに至るプロセスを客観的に捉え, 学習することの意義を感じたり, 自己の感情や行動を統制したりすることができる力を育成していく必要がある。

#### (2) 課題解決的な学習を通じた資質・能力の育成

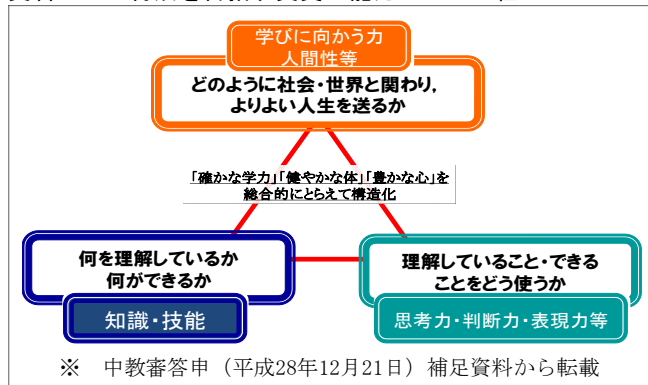
授業を通してこれまで述べてきた資質・能力を育成するためには, 基礎的・基本的な知識・技能を活用した課題解決的な学習を重視するとともに, 児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習が促されるよう工夫する必要がある。なぜなら, 思考力・判断力・表現力等は児童生徒が課題解決に取り組む中で発揮することによって高まる資質・能力であり, 個別の知識・技能は課題解決の文脈や状況に応じて組み合わせられたり, 関連付けられたりしながら活用されることによって体系化が図られ, 理解を伴った知識・技能として定着が図られていくものだからである。また, 他者と

資料1-9 学校教育法が定める学力の三要素

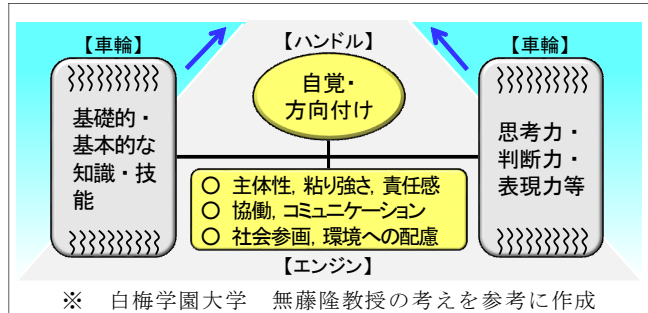
**学校教育法第30条**  
 小学校における教育は, 前条に規定する目的を実現するために必要な程度において第21条各号に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。  
 2 前項の場合においては, 生涯にわたり学習する基盤が培われるよう, 基礎的な知識及び技能を習得させるとともに, これらを活用して課題を解決するために必要な思考力, 判断力, 表現力その他の能力をはぐくみ, 主体的に学習に取り組む態度を養うことに, 特に意を用いなければならない。  
 (下線は筆者による)

※ 第30条第2項は, 中学校及び高等学校に準用

資料1-10 育成を目指す資質・能力の三つの柱



資料1-11 課題を解決するために必要な資質・能力



考えを比較・検討することによって互いの考えの相違点や共通点に気付き、そのことが問題意識を一層高めたり、自分の考えを見直し、新たな考えをつくり出したりすることにつながるなど、主体的な学習態度に関する能力の育成に好影響を与えることが期待できるからである。このような学習活動の充実は、学習指導要領においても重視されており、いずれの教科等においても思考力・判断力・表現力等の育成を目的とした学習活動として例示されている（資料1-12）。

そこで、このような課題解決的な学習を展開するに当たっては、どのような過程においてどのような資質・能力を重点的に育成するのかを明確にして授業に臨むために、表出させたい児童生徒の姿を資料1-13のように具体的に想定しておくことが重要である。その際、全国学力・学習状況調査等の分析を踏まえ、文章等から情報を正しく読み取ることや書いたり話したりするなど、表現を通して自分の考えを整理すること、考えの相互交流を通して自分の考えを多面的・多角的に検討すること、学習した過程や内容を振り返り自己の高まりを感じたり、次に生かすための改善点等を明確にしたりすることなどを特に大切にしたい。

資料1-12 学習指導要領における学習活動の例示

小学校及び中学校学習指導要領 第1章 総則 第4 2(2) 各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童(生徒)の興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習が促されるよう工夫すること。					
	国語科	社会・地理歴史・公民科	算数・数学科	理科	外国語活動、外国語科
小学校	言語活動	問題解決的な学習	算数的活動	問題解決の活動	外国語による体験的なコミュニケーション活動
中学校	学習過程の明確化	課題追究的な学習	数学的活動	科学的に探究する学習	外国語による4技能にわたるコミュニケーション活動
高等学校		課題探究的な学習		探究的な学習活動	

資料1-13 課題解決的な学習<sup>\*1</sup>の過程における具体的な姿の例と資質・能力

学習過程 <sup>*2</sup>	具体的な姿の例	基礎的・基本的な知識・技能	思考力・判断力・表現力等	主体的な学習態度
課題の把握 (課題を見だし、追究意欲を高める)	・ 自ら対象に働き掛けたり、試行錯誤したりして、情報を収集することができる。	○ <sup>*3</sup>		○
	・ 既存の知識や経験と照らし合わせたり、友達の考えと比較したりして、課題を見いだすことができる。		○	○
	・ 見いだした疑問や課題を整理・焦点化するなどし、明確にすることができる。		○	
	・ 目標を自覚したり、学習する意義を見いだしたりすることができる。			○
情報の収集 (見通しをもって必要な情報を収集する)	・ 課題に対する予想や仮説を立て、検証方法を考えることができる。	○	○	
	・ 「整理・分析」に必要な情報を主体的に粘り強く収集しようとすることができる。			○
	・ 課題解決に必要な知識・技能を習得したり活用したりすることができる。	○	○	
整理・分析 (収集した情報を整理、分析する)	・ 情報や結果を目的に応じて図や表、グラフなどに整理・分類し、傾向や共通点、差異点を捉えることができる。	○	○	
	・ 自分の予想や仮説を見直し、必要に応じて修正したり、再度確かめたりすることができる。		○	○
まとめ・表現 (課題に対する考えをもち、適切に表現する)	・ 調べて得た事柄を基にして、自分の考えをもつことができる。	○	○	
	・ 自分の考えが相手に伝わるように、話し言葉や書き言葉での確に述べるすることができる。	○	○	
	・ 自己の学習状況を振り返り、学んだことの価値や自己の高まり、今後の努力点等に気付くことができる。			○
	・ 実生活や実社会等へ適用して説明することができる。	○	○	○

\*1 「課題解決的な学習」という表現は、「問題解決的な学習」と同義として用いている。

\*2 学習過程は、総合的な学習の時間における探究的な学習の過程を参考にした。

\*3 各過程において、特に発揮されていると思われる資質・能力に○を付けた。

4 授業において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

(1) 課題設定の視点

前述した資質・能力を授業を通して育成するためには、児童生徒が主体的・協働的に課題解決に取り組む必要性を感じることができる課題の設定が重要である。そこで、主体的な学びを促すという側面からは資料1-14のAに示すような課題を、協働的な学びを促すという側面からはIに示すような課題の設定が必要であると考えられる。例えば、「知識・技能の活用を促す課題」は、既習の知識・技能を活用することによって、見通しをもって課題解決に取り組む、その過程を通して知識・技能を確実に習得することが期待できる。また、「情報を多面的に収集、検討する必要がある課題」は、複数の情報を比較・検討する中で根拠を明確にするなど、論理的、批判的な思考の発揮が期待できる。このように、児童生徒にもたらされる効果を明確にした上で、課題を設定することが大切である。

(2) 課題設定に当たって

前述のような課題を設定するためには、資料1-15に示すように単元の系統性やねらい、教材や題材の特性を十分に把握した上で、本単元で育成したい資質・能力を評価規準の設定を通して明確にする必要がある。その際は、児童生徒にとってその教材を学ぶ価値や楽しさは何か、また、どのようなつまづきが想定されるかを検討することが重要である。その上で、児童生徒が自ら課題を見いだす力を高めることができるよう、提示する事象や場面、課題発見のきっかけとなる活動の設定等を工夫する必要がある。また、学習を進める中で児童生徒が必然的にもつ問いを取り上げ、課題として焦点化することも考えられる(資料1-16)。いずれの場合も、全ての児童生徒が課題意識をもって主体的・協働的に学ぶことができる課題であるか、難易度も含めて十分に検討する必要がある。課題解決を通して、一人一人に深い理解を促すことのできる課題設定が求められる。

資料1-14 考えられる課題設定の視点

- A 児童生徒が自分の事として受け止め、学習意欲を高めることができるような課題**
- (ア) 知識・技能の活用を促す課題 (見通しをもった課題解決, 知識・技能の確かな習得)
  - (イ) 実社会や実生活との関連について認識を深める課題 (学習内容の価値の実感)
  - (ウ) 自分なりの考えを導き出す必要のある課題 (自己決定, 自己判断の必要性の実感)
- I 児童生徒が学び合うことの意義を感じ、協働して解決する力を高めることができるような課題**
- (ア) 情報を多面的に収集, 検討する必要がある課題 (論理的, 批判的な思考の発揮)
  - (イ) 考えを出し合い, グループの意見として集約する必要がある課題 (協働する力, 創造的に思考する力の発揮)

資料1-15 課題の設定例(概要)

**例：小学校理科 第6学年「水溶液の性質」**

**単元の位置とねらい**  
5年「物の溶け方」→ **本単元** → 中1「水溶液」  
水溶液の性質や働きについて考えをもつ。

**教材の特性**  
・ 水溶液にはそれぞれ固有の性質があり、それらの性質を生活に利用している、など。

**本単元で育成したい資質・能力(評価規準)**

関心・意欲・態度	思考・表現	技能	知識・理解
興味・関心をもつ 追究する。	推論しながら追 究し、表現する。	実験器具を適切 に用いて調べる。	水溶液は酸性、中性、 アルカリ性に分けられる。

**教師による事象提示や場面設定** ※単元末に設定

〇〇先生からの挑戦状  
ラベルのついていない試験管の中には、塩酸、石灰水、アンモニア水、ミョウバン水が入っています。この中で、ミョウバン水はどれか見分けられますか。

※ミョウバン水は、未習の水溶液である。

**児童が見いだした課題と、解決への見通し**  
正体不明の水溶液を見分けるには、どうすればよいのだろうか。  
・ まず、ミョウバン水の性質を調べ、その結果を基にして見分けるといいのではないか。

資料1-16 児童生徒の問いが連続、発展する展開の例

**例：数学Ⅰ「三角比」、数学Ⅱ「三角関数」**

**直角三角形において、 $\sin 30^\circ$  について学習**

生徒がもつ問い「 $\sin 120^\circ$  など、 $90^\circ$  以上の角では  $\sin$  の値はないのだろうか。」

**課題**  
90° 以上180° 以下の角の  $\sin$  をどのように定義したらよいか。

**結論**  
半径  $r$  の円周上の点  $(x, y)$  をとり、 $\frac{y}{r}$  で  $\sin$  を定義する。

生徒がもつ問い「 $\sin(-30^\circ)$  など、負の角では  $\sin$  の値はないのだろうか。」

**課題**  
負の角や180° よりも大きな角の  $\sin$  をどのように定義したらよいか。

**結論**  
角度に回転の向きと大きさを考えて  $\sin$  を定義する。

5 児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か

(1) 実践上の課題を踏まえた工夫の視点

当課が実施した実態調査では、主体的・協働的に学ぶ学習は大切だと考えるが取り組ませることができていない理由として、ア、イ時間確保の困難さやウ学力差への対応の難しさ、エ、キ学力向上への懸念、オ、カ学習活動に必要な能力や態度の不足等を挙げる教員が多く見られた（資料1-17）。また、言語活動等の充実にあたっては、確かな成果が認められてきた一方で、活動の形骸化や希薄な議論など質的な深まりを欠く授業に陥ってはならないことが中教審等において指摘されている。

そこで、このような課題を踏まえ、次の三点から工夫することを提案する。

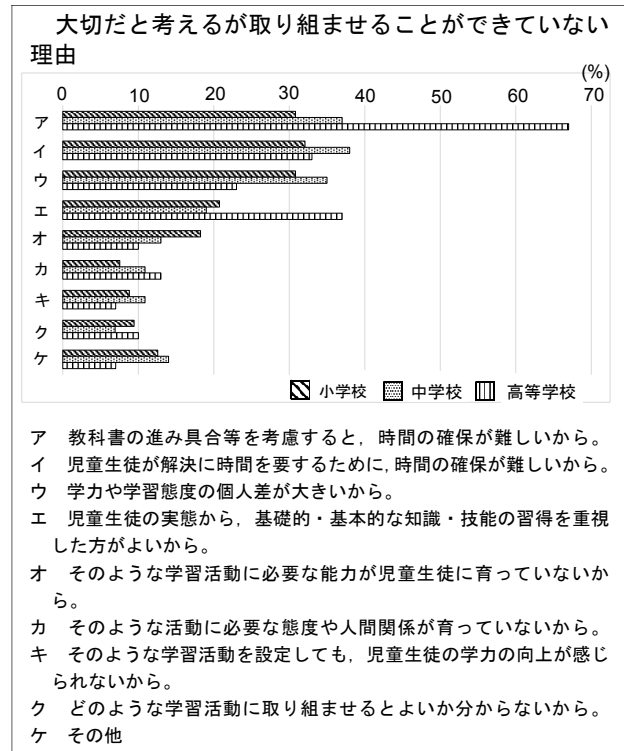
- ① 目標を踏まえた具体的な学習活動の設定
- ② 意図的、計画的な指導と評価の一体化
- ③ 自覚・方向付けを促す振り返りの充実

(2) 目標を踏まえた具体的な学習活動の設定

主体的・協働的に学ぶ学習を位置付けるにあたっては、言語活動の充実や、ペア又はグループ学習の推進、ICT及び外部人材の効果的な活用などが考えられるが、いずれの場合も単元や題材の目標を十分踏まえ、具体化を図る必要がある（資料1-18）。

そこで、授業においては、まず解決すべきことは何かといった目標を児童生徒に明確に捉えさせることが大切である。そして、何を手掛かりにどのように考え議論するのか、また、思考の過程や結果をどのように整理し表現させるのかを明確に捉えさせる必要がある。特に、グループで考えを集約させる場合は、個人にあらかじめ考えをもたせるとともに、どのような手順、方法で協議を進めるのかを明確にする必要がある。また、集団による学び合いが充実するためには、活動の意義や目的、ルールを共有させたり、相手意識のある話し方や聞き方を理解させたりしながら、実際の活動を通して互いに学び合い、高め合うことのできる人間関係を築いていくことが重要である（資料1-19）。

資料1-17 主体的・協働的に学ぶ学習の実践上の課題



資料1-18 言語活動の充実の視点と活動例

場面	視点	活動例
考えを深める場面	一人一人が自分の考えをもち、他者の考えとの共通点や相違点を意識しながら考えを深めていくような言語活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>ペアやグループで意見を交換する。</li> <li>付箋を用いて、考えを書き出したり整理したりしながら話し合う。</li> <li>ホワイトボードや模造紙を使って話し合う。</li> </ul>
発表する場面	自分でまとめた事柄などについて説明したり、相手の立場や考えを互いに尊重して話し合ったりするような言語活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>調べたことや考えたことを説明する。</li> <li>製作物を使って発表する（ポスターセッション）。</li> <li>立場を決めて議論する。</li> </ul>
書く場面	集めた情報を整理・分析し、論理的にまとめて表現するような言語活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>レポートにまとめる。</li> <li>新聞にまとめる。</li> <li>ICTを活用してまとめる。</li> </ul>

※ 文部科学省「言語活動を通じた授業改善のイメージ例」を基に作成。

資料1-19 学習活動設定上の指導の要件と工夫例

指導の要件	工夫例
問題意識の焦点化	<ul style="list-style-type: none"> <li>図表等を用いた考えの可視化を通じた差異点、共通点の明確化</li> </ul>
考える手掛かりや考え方の明確化	<ul style="list-style-type: none"> <li>手掛かりとなる情報（観察、実験や取材等の情報収集の結果、既習事項、教師が提供する資料等）の明確化</li> <li>比較、関連付けを図る対象と着眼点の明確化</li> </ul>
表現方法の明確化	<ul style="list-style-type: none"> <li>ジグソー学習等による交流とまとめ</li> <li>図表を用いた考えの整理、集約</li> </ul>
学び合う集団づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>学び合う意義や目的の共有</li> <li>相手意識のある話し方や聞き方に関する理解の促進</li> </ul>



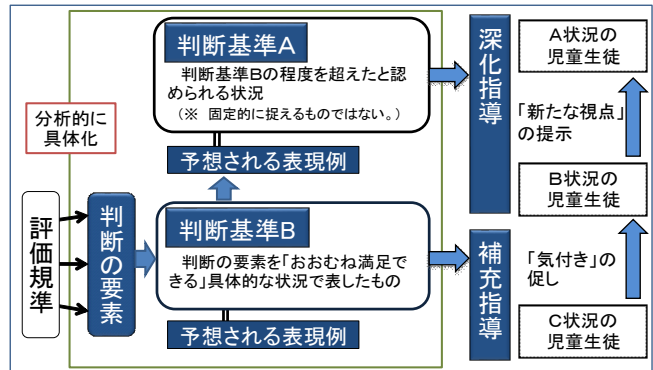
(3) 意図的、計画的な指導と評価の一体化

主体的・協働的に学ぶ学習の設定に当たっては、単元レベルで意図的・計画的に指導と評価の一体化を図ることが効果的である。そこで、単元の指導計画を立案する際に、目標を達成するためにはどの時間にどのような指導と評価を重点化するか検討する必要がある。そして、児童生徒が思考力・判断力・表現力等を発揮している様子を適切に評価し、指導に生かしたい。当センターではこれまで、児童生徒の思考や判断の結果が表現される「説明」や「論述」等の言語活動において、目標の達成状況を判断する具体的な尺度として、評価規準に基づいた「判断基準」の設定を提案してきた。主体的・協働的に学ぶ学習においても、思考・判断・表現の状況を見取り、個に応じた補充指導や深化指導に生かすためには「判断基準」の設定が重要であると考えられる。その際、予想される表現例を「おおむね満足できる状況（B状況）」並びに「十分満足できる状況（A状況）」について想定することが、教材研究や授業中の指導と評価をより確かなものとするのである（資料1-20）。そこで、授業構想に当たっては、習得、活用を図る知識・技能を明確にした上で読み取りや解釈、説明などの思考・表現する活動を適切に位置付けたい（資料1-21）。

(4) 自覚・方向付けを促す振り返りの充実

自らの見通しに基づいて課題解決に取り組むと、その妥当性を検討し、判断する必要性が生じる。また、他者と協働して取り組むと、相手の反応により自分の考えのよさや不十分さに気づきやすくなる。このように、主体的・協働的に学ぶ学習には、自己の学習状況について自覚を促す働きがあると考えられる。そこで、より効果的なものとするために、振り返りを促す活動や働き掛けを重視したい。その際、今の自分の状態を知るだけでなく、これから自分はどのようにしていけばよいかを考えさせ、よりよい方向に自分を変えていこうとする力が高まるよう支援したい（資料1-22）。

資料1-20 「判断基準」に基づく思考・判断・表現の評価



資料1-21 主体的・協働的に学ぶ学習を位置付けた授業構想

例：中学校社会科 第3学年「人権と共生社会」

課題解決のための 主な学習活動の流れ		形態	主体的・協働的に学ぶ学習
導入 課題設定	「関心・意欲」の喚起 「憲法に社会権が規定されているのはなぜだろうか。」	一斉	読み取り 資料を基に生徒が設定。
展開	「基礎的・基本的な知識」 ・社会権の種類 ① 生存権 ② 教育を受ける権利 ③ 勤労の権利 ④ 労働基本権 ・社会保障制度の充実	一斉・個	読み取り 教科書記述や憲法条文から生徒がリストアップ。
課題追究 習得 活用	「資料活用」の技能 【資料】 ア 憲法第25条① イ 小学校入学の日の様子 ウ 生涯学習（料理教室）の様子、外	グループ	読み取り・解釈 資料から読み取った情報の意味を考察。
	「思考・表現」 資料を基に考え、説明する ・生存権等が定められている理由 ・社会保障制度の充実が必要な理由	グループ	解釈・説明 知識・技能を活用して説明し合う。
終末 課題解決	予想される生徒の表現例 「全ての社会権は、人々が人間らしく生きるために必要な権利であるから。」	個・一斉	説明 各自でまとめた案を作り全体へ説明。

このような表現に加えて、精神的、経済的に充実した生活の保障について言及している場合などは、A状況と判断できる。

資料1-22 育成したい資質・能力を踏まえた振り返りの視点

